

一瞬は長く、人生は短い

非力な大学教員をやっているで頭の痛いひとつが、大学に残りたい、ついにはお前の指導を受けた
いという学生が現れることである。

学生とは言っても、世間一通りの知恵は身につけているから、気むずかしげで就職斡旋能力もな
さそうな教師を選ぶといった愚行はまず稀である。ただ、「人の行く裏に道あり花の山」といった
深読みに溺れるせいも、たんに季節の変わり目か、ままそういう学生が現れる。

研究者や大学教師のポストは少ないこと、一本立ちまでが大変なこと、就職には研究実績以外に、
運やコネが思いの外ものを言う場合があることなど、一応の事情を話してお引き取り願うか、だめ
ならほかの先生を紹介する。まあ大体はそんな風にしておさまる。

それでも粘る豪者もさがたまに出ると、奥の手がある。岡義達よしと『政治』を渡して、読んで面白かった

『政治』

岡義達、岩波新書、一九七一年

らまたいらつしゃい、その時は、どこが面白かったか説明してくださいと付け加える。それでもなお押しかけてくる学生は、今まではない。『政治』は、非力な政治学教員のお助け神である。

ただ、政治学研究者の資質を測るのにこの本が最善だと言えば、異論は出るだろう。著者は寡作で知られ、「政治学的便秘症」というあだ名まであった。よく研究されているのは認めるが、成果がほとんど出てこないという意味らしい。さらに言えば、稀に世に出る業績は、長い便秘の後の排泄物のように、ただならぬ香臭を伴う。そんな賛嘆とも嫌みとも分からぬ感想もこめられているかもしれない。

たんに噂として小耳に挟んだだけだから、真偽のほどは保証しないし、名前も秘すが、さもありなんとうなずいた話がある。もつと露骨に、本当なら面白いのにと、ひそかに願った風聞がある。念押しになるが、耳にしたのは事実で創作ではない。この手の創作が次々に浮かぶようなら、教師などには見切りをつけて、作家か詐欺師に転向している。

ずいぶん昔、まだ進歩派の先生がキラキラ輝いていたころ、権威ある雑誌に、文章作法に関するベストセラーの書評が掲載された。書評の対象となった著者は著名な進歩派学者だったが、「この書評、いったい何が言いたいのか分からん。俺がバカか、向こうが阿呆か」といった類の感想を洩らされたよし。

この先生は稀代の知識人を自他ともに認められた方だから、ご自分をバカと考えられていたとは信じにくい。回想録などに弱気なインテリの顔がのぞくこともあるが、それは人なら避けられない

バイオリズムの行ったり来たりで、真実バカを自認されていたなら、日本の進歩はもうすこしはましだったにちがいない。だから避けがたい結論は、書評したのが阿呆ということである。そして、その書評者が、ほかならぬこの『政治』の著者である。

「……ある種の文体とある種の論理とは、たえずむすびついて現れてくる。したがって、新しい思想は文章をこわしやす。又、こうして文体は古い思想によつてもたれる。我々はつねにその背後に美文を持つ……文体を問題にすれば、それは文体をうみ出した社会、そして社会の中で支配している認識論に及んでいくことになるであらう」

これが問題の書評の一節である。凝縮された文章の一部を前後の脈絡なく引用し、途中をはしょつたりもしたから分かりにくいがおおよその雰囲気、文章の癖のようなものは感じ取っていただけるのではないかと思う。これを、難解を装った「悪文」と見るか、古い思想に支えられた「美文」と考えるか、新しい思想を伝える達意の「名文」と賛嘆するか、そのあたりは人による。つまり「人がつねにある社会集団の中で思考し、行動している以上、当然であらう」。

思うに引用の一文や『政治』の文体はよく分かる、わくわくするなどという人ばかりがこの世にあふれるなら、実に気持ちわるいにちがいない。人の住む業界が、バカらしくも崇高に多様であるように、一色ひといろの文体が世間を支配するなら、疫病か専制だと思ふ。それはそうにしても、こんな文体につきあう読者が、昔に比べて増えたか、減ったか、相変わらずなのか、文体流文学の実証研究でもあれば御託宣を仰ぎたい。ちなみに初版は一九七一年である。

さらに考えるに、達意の文章と達者な文章は、似ているようで大いに違う。達者な文章は、ふぬけた顔でおばさん相手の講演業に忙しいオジサンにも書けるが、達意の一文はやや重荷だろう。達者な文章で立派な御託宣やらご感想をマスコミに提供してみても、天知る、地知る、人も知る。哀しいかな、老残という言葉もある。さらに恐るべきは、若くから老残のそしりを受け、長い余生を生き抜くことだろう。

翻って、「悪文は褒め言葉でもある」。わたしごとで恐縮だが、教師の卵だったころ、生煮えで、書いた当人すら意味の分からない文章の悩みを相談したところ、『政治』の著者はそういなされた。一瞬は長く、人生は短い。ほんの昨日のように記憶は鮮明だが、それから三十年が過ぎた。教師が駄目なら物書きで食うかなど思っていた私は、本当に途方に暮れた。

それで思い出したのが、高校生時代、美人の色香に迷って文芸部の雑誌とかの埋め草に協力した時の痛い体験である。受験勉強の傍ら、言われただけの枚数をせつば詰まった締めきりに間に合わせたのは、かわいい子に頼まれたからという以外理由はないが、その後の合評会がいけなかった。出席された顧問の先生は、知る人ぞ知る、知らない私は恥っかきの武部先生である。『憂鬱なる党派』の著者高橋和巳を、誤って後継者に据えた吉川幸次郎の高弟で、同人雑誌の雄、神戸『ヴァイキング』の同人、後に李白や杜甫の注釈で親しまれる武部利男さんである。

この武部さん、講評が私の「力作」に及ぶや、「文章がまずいのは、人がよいのでしょうか」と一言で終わり、次に進まれた。文章をけなされるのもっともだが、美人揃いの文芸部の前である。